

ICU Farm Project 2025

ICU 三鷹キャンパスの森事務局

icu-mitaka-campus-no-mori@icu.ac.jp



内容

はじめに	3
3つの活動拠点	4
フォレストガーデン	5
果樹園	10
わさび田	11
ファームプロジェクトインターン	13
2025年度の活動内容	13
インターン活動を通して	16
ボランティア活動「Farm Days」	19
農地の区画オーナー制度「プロットガーデナー」	20
2025年度プロットガーデナー一覧	20
2025年度プロットガーデナー参加者の気づき・学び	22
アジア学院協働プログラム開催	24
2025年度の活動一覧	29
2025年度自然関連企画・イベント一覧	29
教育・研究利用実績	29
おわりに	30

はじめに

国際基督教大学（ICU）の自然豊かなキャンパスは、2023年に環境省が主導する「自然共生サイト」に認定されました。

この認定を機に、ICU 三鷹キャンパスの森事務局では、「ICU 三鷹キャンパスの森」を単なる保全の対象ではなく、学生・教職員、同窓生や地域住民が主体的に関わり、共に育む「学びの森」として活用していこうと取り組んでいます。

「ICU ファームプロジェクト」は、この豊かな自然を舞台に、食や農を通して、土に触れ、学生・教職員が共に学び、新たなコミュニティを築く場として 2024 年度に始動しました。

2 年目を迎えた 2025 年度は、プロジェクトが「構想」から「実践」へと力強く飛躍した一年となりました。インターン学生による活動が始まり、かつて未利用地だった空間が食や自然を身近に感じられる場へと整備されてきました。また、ボランティア活動日「Farm Days」や、農地のオーナー制度「プロットガーデナー」といった試みを通じ、キャンパスにおける「食と農」の体験が、日常の風景となりつつあります。

本レポートでは、この一年の活動の軌跡と、そこに関わった人々の声をお届けします。ここから生まれる新たな「対話の風景（Dialogue-scape）」を、ぜひ一緒に感じていただければ幸いです。

3つの活動拠点

2025 年度に活動を行った以下の 3 つの拠点エリアについて、これまでの進捗をご紹介します。

- かねてより学生による食農活動が行われてきた「フォレストガーデン」
- 2021 年度から 2025 年度までの中期計画で掲げられた「果樹園」
- 三鷹市や地域ボランティアと協働で三鷹大沢わさびの栽培を行う「わさび田」

拠点エリアの位置



フォレストガーデン

ICU 高校テニスコート南側の道路を挟んだ向かい側に位置しています。かつてゴルフコースとして、その後は伐採木や瓦礫の置き場となっていたこの場所は、近年、学生たちが自発的に畑活動を始めたことで再び息を吹き返しました。現在は、農作物栽培に限らず、養蜂や堆肥づくりなど、多様な食農活動が展開されるフィールドとなっています 2025 年度は、豊かな緑に囲まれた場所として、多目的に利用できるように大きく整備が進みました。



Dialogue-scape の構築

フォレストガーデンをより活性化するため、ICU 卒業生でランドスケープデザイナーとして活動されている市川寛氏に設計を担当していただきました。

この場所がどのような場所であるべきか、というコンセプトからブレインストーミングを重ね、場所性をとらえたうえでのデザインとして「Dialogue-scape（対話のある風景）」を構想していただきました。

Dialogue-scape のイメージ図



自然を単なる背景として扱うのではなく、試行や関係性を育むフィールドとしてとらえ直し、「自然」、「自分自身」、「他者」と向き合う「対話」が重なり合う場として考えられました。

畑作業をしながら友人と語り合ったり、一人ベンチで読書をしたり、何も考えずにぼんやりと空を見上げたり...この場所が、新たな気づきや思考のきっかけが生まれ続ける場となり、育っていくことを目指します。

3つの対話

3 types of dialogue



自然との対話

光、風、木々、虫、鳥、土など
自然の気配と身体が静かに結びつく。



自分自身との対話

自然の中で、内なる声に耳をすませ
自分自身を静かに見つめ直す。



他者との対話

緑に囲まれた屋外空間での対話は
互いの存在を認め合う時間となる。

ウッドデッキの設置

Dialogue-scape として、フォレストガーデンは農の営みと日常の滞在が重なり合う、自由な使い方が可能な屋外空間としてデザインされています。

これまでのフォレストガーデンは、ゆったりと時間を過ごすことのできるベンチ等がなく、ここをフィールドとして活動する学生サークルが活動時にのみ立ち寄る場所でした。

2025 年度はより多様な目的で集うことができるよう、ピクニックベンチテーブルやロッキングチェア、ウッドデッキを設置しました。これまで肥料置き場として使われていた空間を再編し、フォレストガーデンの中心となる場所にウッドデッキが配置されています。視線や言葉、活動が交差する場として、複数のデッキが人の流れと居場所を生み出していくことが意図されています。

エリア中心部整備前



エリア中心部整備後



未利用地の整備

インターン学生の日々の活動や、学生・教職員を対象とした FARM DAYS にて、フォレストガーデン内に新たな農地やレイズドベッドなど、まだ使われていない場所を広く活用する整備が進められました。

・レイズドベッド

田んぼで使われる畔板を活用し、レイズドベッドを製作。中の資材は、フォレストガーデン内で集められた枝や草に加え、学生サークル「ICU コンポスト」の堆肥が入っています。



別のスペースには、キャンパス内で伐採された竹を使ったレイズドベッドも製作しました。農法試行エリアとして、アジア学院にて学んだ「ヒューゲルカルチャー」や「協生農法（シネコカルチャー）」など、レイズドベッドごとに異なる農法で栽培し、比較できるようにしています。

・スパイラルハーブガーデン

パーマカルチャーのデザイン手法のひとつで、石をらせん状に積んで日照や湿度の異なる環境をつくり、さまざまなハーブを育てるレイズドベッドです。フォレストガーデン内で得られた瓦礫や石を活用して製作しました。2026 年春以降にいろいろなハーブを植えていく予定です。



・ロッキングチェア

緑に囲まれたこの広場で、リラックスしながら自分自身や自然と向き合う時間を過ごす場所として、ゆったりと座れるロッキングチェアを設置。電動ドライバーを用いて協力して組み立てました。

果樹園

第二女子寮の跡地であるこの場所は、日常的に食を感じられる場所として果樹園を設置することが 2020-2025 年度中期計画に掲げられ、卒業生松島百花さんによるデザインのもと、2025 年冬に果樹が植えつけられました。今年度は夏の除草作業といった維持管理が主な活動となりました。建物の跡地であることから地盤が固いため、想定よりも成長が緩やかです。2026 年度は、果樹周囲の土壌改良に取り組みつつ、空きスペースを活用し、作物栽培を行う予定です。



わさび田

包括的連携協定のもと、三鷹市生涯学習課と協働し、2024年にICUのわさび田跡地を開墾し、「三鷹大沢わさび」の栽培を行っています。苗を植えてからおよそ2年が経過する2026年3月に、三鷹市とわさび田に関する覚書締結式が実施されました。これを機に、両者の連携をさらに強化し、わさびの保全・活用に向けた取り組みが行われる予定です。

茎わさびの試食会を実施

2025年4月11日、わさびの中でも特に香り高い部位である「茎」の試食会が行われました。参加したICU生や教職員は、わさびの香りとシャキシャキとした歯ごたえを堪能しました。

三鷹市との覚書を締結

2026年3月5日、三鷹市とICUは、包括的連携協定に基づく取り組みの一環として、ICUのわさび田における「三鷹大沢わさび」のさらなる保全・活用に向けた覚書を締結しました。今回の覚書は、本学内にあるわさび田の保全や環境整備、さらには収穫物の活用に至るまで、両者が連携して事業を推進することを目的としています。締結式では、まず「三鷹まるごと博物館」のボランティアの方々より、日頃の保全活動の様子が映像と共に紹介されました。続いて、本学の学生チーム「わびさびワサビ」が登壇し、1年にわたり取り組んできた「三鷹大沢わさびの認知度向上」に向けた活動成果の発表が行われました。

締結式の終了後には、三鷹大沢わさびの特別試食会が開催されました。会場では、ボランティアの方々によって丁寧に調理されたわさび料理が振る舞われ、参加者は三鷹大沢わさび特有の風味を楽しみました。





今後は以下の事項を柱として連携を強化し、三鷹市と本学のさらなる発展が期待されます。

- 三鷹大沢わさびの保全と栽培
- 三鷹大沢わさびに関する調査、研究
- わさび栽培を通じた自然環境の保全
- 連携事業による地域参加および地域交流の促進
- 活動を通じた教育および生涯学習の推進
- 生産された三鷹大沢わさびの活用



ファームプロジェクトインターン

2025 年 7 月から、ファームプロジェクトを推進していくチームとして、在学生数名からなる有償インターン制度を始めました。インターン学生は、約 1 年間の任期のなかで、週に 2 日程度活動し、プロジェクト拠点エリアの整備や、イベントの企画・運営、広報活動に携わります。2025 年度は、6 名のインターン学生が活動しました。



2025 年度の活動内容

● 拠点エリアの整備

フォレストガーデンと果樹園にて、夏場は雑草や農地管理を主に、秋冬は未利用地の開墾やレイズドベッドの製作を行いました。土木作業から農地管理、DIY まで幅広く整備を行いました。

● 看板製作

活動拠点内のサイン板を、木材を使って製作しました。プロットガーデナーのサイン板も、インターン学生で手作りしています。

● FARM DAYS の安全管理

農作業未経験の参加者とのコミュニケーションをしつつ、道具の使い方や作業の仕方など、安全管理を行っています。

● イベント企画・運営

メンバー間で担当を割り振り、プロジェクトの認知向上や活動拠点の活用に向けたイベントを企画・運営しました。



イベントの企画・運営

草刈りを中心とした維持管理作業が落ち着いてきた秋ごろから、インターン学生で役割分担をし、イベントの企画・運営を行いました。2025年度は、2つのイベントを実施しました。

CTL コラボ企画マインドフルネスイベント

2026年1月22日、プロジェクトの認知向上と、フォレストガーデンの有効活用を目的に、「一人になりたいけれど、孤独にはなりたくない学生」が自然と自分と向き合う機会となるよう、自然に囲まれたフォレストガーデンでマインドフルネスを企画しました。かねてより学生向けにマインドフルネスイベントを開催されているCTLに協力いただき、コラボイベントとして実施することができました。2026年度は、学期ごとに定期開催を予定しています。



【参加者募集中】

ネイチャー・マインドフルネス体験

**土を見つめ、
自分を見つめる。**

～ココロとカラダのクールダウン～

**2026
1/22 木
13:00-13:50**

会場：フォレストガーデン
集合場所：T館正面入口付近

共催：CTL
（学修・教育センター）
監修 臨床心理士
田中昭典氏

こんな方におすすめ！

- 「新年の疲れ」を感じている
- 自然の中でリフレッシュしたい
- 自分と「やさしく」向き合いたい

お申し込みはこちらから

主催：ICU三鷹キャンパスの森管理員
MAIL: icu-mitaka-campus-no-mori@icu.ac.jp

ICU 三鷹キャンパスの森

収穫物提供イベント

ICU に畑があること、ファームプロジェクトへの認知を向上することを目的に、収穫物である大根をスープにして提供するイベントを実施しました。「ICU の自然を味わおう」というテーマで行い、全 150 杯分が学生や教職員に提供されました。ICU で採れたものを食べることを通して自然とつながる取り組みとして、2026 年も継続的に実施していきます。



インターン活動を通して

約半年の活動を経て、気づいたことや学びをまとめました。

山本 拓海（教養学部 3 年）

「心身を内外から健康に！」

農業をやってみたかったから応募しました。農作業や雑草取りは覚悟していましたが、まさか地形を変えるまで至ると思っていませんでした。人力での開拓はまだまですることがわかりましたし、野草や野菜の種類から育て方まで、幅広く知識を身につけることができました。夏場の雑草除去は気温や天気が大変な要因でしたが、それが体全体で四季を味わえる時間として良かったです。自分で育てた野菜を収穫する時は、ワクワクして楽しかったです。



溝尾 悠（教養学部 3 年）

「土木」

活動を通して、野菜や野草の知識を得るだけでなく、人間は自然の恵みを分けてもらっている存在なのだと実感しました。道端の緑を「食えるか」という視点で見るとなると、視界に入ってくるものが増えたのは興味深かったです。特に好きな作業は土地や道の開拓で、地図の等高線が変わるくらい地形を変化させたときは、目に見える変化に高揚しました。自分を生かしている世界について理解を深める一歩になるので、ぜひお勧めしたいです。



本橋 可麻（教養学部 4 年）

「笑顔が集うフォーミング」

残りの大学生活を活かしたいと考えていた時に募集を見つけました。人と交流することに疲れていたもので、自然と向き合うキーワードが魅力的でした。ゼロから場をデザインする過程に立ち会えたことや、構想を企画に落とし込むプロセスの面白さを知ることができました。一人ひとりの個性を理解しながらみんなで協働でき、大変なことも笑顔で取り組める余白がある活動です。自分のスキルを活かして仕事ができただけで、続けられた要因になりました。

新 衣梨花（教養学部 3 年）

「社会の縮図」

企画運営に携わってみたいと参加しました。多種多様なメンバーの力を総動員して一つのプロジェクトを推進することは、まさに「社会の縮図」でした。夜まで語り尽くしたチラシ作りや、早朝の勤務で普段見ることのない学校の時間を全身で体感できたことは忘れられません。自分で育てた野菜を収穫して食べる喜びだけでなく、現場での作業経験を経て、個々のアプローチで食と農に関わっていく機会の大切さを学ぶことができました。



浦部 灯（教養学部 1 年）

「塵も積もれば山となる」

元々、土や自然に触れる生活をしてきましたが、大学でも継続的にその時間を作りたいと思い参加しました。一番印象に残っているのは、果樹園の木を雑草の山から救い出したことです。始めは「出来っこないんじゃないか」と思うことでも、皆で協力してやっていると想像以上の成果が出ます。大変な作業もありましたが、何より楽しいのは「お茶の時間」でした。自然という大きなものを相手にしながら、共に理想を現実化していく楽しさがあります。



小嶋 陽太（教養学部 4 年）

「ICU の豊かな自然と ICU の人々のファシリテーター」

食と農を通じて ICU の人々と自然の距離を縮めたいと考え応募しました。7:30 の作業のために 5 時起きで大学に向かうのは大変でしたが、竹の根を取る作業や、Farm Days で普段馴染みのない人に農を体験してもらったことはとても印象に残っています。プロジェクトの根幹に関わることができ、身体的なタフネスや共同スキルも身につきました。学校の中の間づくりに関わったこの場所は、卒業後もずっと気に留めていたい場所の一つになること間違いなしです。



ボランティア活動「FARM DAYS」

「FARM DAYS」は、学生や教職員であれば誰でも参加できる、ICU ファームプロジェクト推進のためのボランティア活動日です。フォレストガーデンやわさび田、果樹園など、学内に点在するプロジェクト活動拠点の整備を目的とし、週に2日ほど開催しています。活動内容は季節ごとの農作業から環境整備まで多岐にわたりますが、何より大切にされているのは、立場を超えた参加者同士の交流です。教室での学びとは一味違う、体を動かしながら学内の豊かな自然を肌で感じ、新たなつながりを楽しむことのできる機会となっています。



2025 年度の主な活動内容

学生インターンとファームマネージャーによる安全管理のもと、自然活動が初めての方でも参加いただけるように授業や進路について和気あいあいと話しながら活動しました。収穫物が採れたときは、参加者が持ち帰ったり、その場で食べてみたりしました。2026 年度は、より気軽に食を感じられる機会を設けられるよう、FARM DAYS の中で採れた作物を調理して食べるコンテンツも組み入れていく予定です。

- レイズドベッド製作
- 地下茎駆除
- 作物の種まき、苗植え、支柱立て、収穫、種取り
- わさび田の管理
- 施肥、畝立て
- ロッキングチェア製作
- 除草
- 道づくり



農地の区画オーナー制度「プロットガーデナー」

2025 年 9 月から、ファームプロジェクトの一環として、既に農的な活動に関心がある学生や教職員を対象とした新しい取り組み「プロットガーデナー（Plot Gardeners Program）」を始めました。参加者は、ICU の在学生や教職員が農地の一画（約 2m²）のオーナーとなり、オリジナルのコンセプトや農法で作物を育てる経験をしながら、作物を栽培することの難しさや楽しさを学びます。

2025 年度プロットガーデナー一覧

2025 年度は、全 14 組 26 名の学生・教職員がプロットガーデナーとして活動しました。個性豊かな各プロットの名称とコンセプトをご紹介します。2026 年度は、更新する方々も含め、全 24 組 50 名が活動予定です。



プロット名称	コンセプト
Selah Field	オーガニック栽培を心がけたいです。農業を通して私たちが自分自身を振り返ることのできるような穏やかな空間づくり、栽培をしたいと思います。
Kukka	花を育てるのは初心者なので、初心者でも育てやすい花を育てようと思っています。それでもきれいに咲かせるように努め、見る人に癒しを届けたいです。
すっごい畑	様々な方法を駆使して、病害虫の駆除、堆肥の作成、土地の栄養管理までを自然の力で実現します。
Little Acre	I would like to do companion planting inspired by the Native American three sisters companion crops: squash, corn, and beans.
青の庭	ラベンダーや勿忘草など秋まきが可能な花を栽培予定。寒色系の色で統一して涼し気な雰囲気にしたいと考えている。開花したら花束を作るか、ラベンダー等香りを楽しめる花はポプリやドライフラワーに活用したい。
Pollinator & Provisions Garden	蝶の成虫を呼ぶ花と幼虫の食草を植え、キャンパス内の蝶と虫を観察したい。それと混植して人間用にもなる食草（してとりあえず1月の七草粥あたりを目指してカブ、大根など）も少々。
Garden Gnome Groceries	I haven't seen the plot so it's hard to know, but I'm currently thinking of around 5 rows. The crops I'll grow will change depending on the season, but the first season will be mostly root vegetables: carrots, daikon, turnips, and autumn variety potatoes. I'm thinking of planting komatsuna and mizuna intermittently in the rows of root vegetables because they don't take up much root space. I will likely use black plastic row covers to retain heat and keep weeds away. I will harvest in November to December, and start another batch of winter crops in January.
Daidai Garden	無農薬、不耕起栽培

The Two Trowels	Vegetables and flowers, typical methods. Have had a garden for most of our lives in Europe.
OK 農場	野菜作りに興味はありつつも未経験の大学職員2名が「大人の、ちょうどいい畑」をコンセプトに、基本に忠実に野菜を作ります。
Nhu & Asahi's Hapi Hapi Garden	未定、栽培した作物で料理を作る予定
Nico Farm	化学肥料や農薬は不使用。コンパニオンプランツや雑草をマルチに活用するなど循環を基本とした栽培を行う。
Fresh Garden	栽培の方法や組み合わせなどを学び知識を身につけることで新たな経験をすること。同じ作物を2通りの方法で栽培するなどすることも考えています。
Garden Pony	学長主催 Café Pony で供する食べ物の栽培



2025 年度プロットガーデナー参加者の気づき・学び

2025 年度の参加者へのアンケートの結果を抜粋しました。

Q 活動を通じて得た一番の「発見」や「驚き」は何でしたか？

生命の力強さと、その繊細さ

「種まきから発芽するまでの時間がとても早く、成長にびっくりしました。」

「作物が周囲の環境や手入れにすぐさま反応し大きく育ったり、逆にダメになってしまう早さには特に驚きました。」

「Komatsu grew massive! (小松菜が巨大化した!)」

「半分の大根は立派に育ったのに、もう半分は全く育たず……。種の種類の違いでこれほど差が出るとは予想外でした。」

🦋 キャンパスに息づく「共生」の形

「畑に行けば必ず何か生き物が見られたこと。ICU には学生・教職員だけでなく色々な生き物も一緒に活動しているんだなと感じました。」

「コンポストや鶏糞など、ICU とその周りの資源を生かしてできることがたくさんあって、恵まれていると感じました。」

「ほぼ毎日新しい雑草が生えてくることに驚いた。そして、土に触るって気持ちいい。」



🧠 「育てる」ための知恵と技術

「育て方を比較したが、畝（うね）よりも苗を植え替える時期の方が大事であったことに驚きました。」

「夏は暑く、冬は土が凍るほど寒い。この気候変化の中で野菜をつくる農業の知識や技術、農家さんの仕事はすごいと思いました。」

「野菜を育てるには、長期的な計画を立てることがとても重要だと気づきました。」

Q 自然や食、あるいは自身の生活に対する見方に変化はありましたか？

スーパーの野菜が「輝いて」見えた

「お店に何気なく並んでいる野菜が輝いて見えました。すごいなあと。」

「店舗に並んでいるような大きく艶のある野菜を作ることが、いかに難しいかを知り、スーパーで野菜を見る視点が変わりました。」

「有機農法なのに慣行農業と見た目が変わらない野菜を見て、どのように育てているのだろうと感心しました。」

「自分の手で作れる」という確信

「シンプルに『食べるものが自分の手で作れる』という実感は、初めての経験だったので新鮮でした。」

「少しでも自分で食べるものを作って生活していきたいという思いが強くなった。」

「It is really nice to have space and access to more 'soil'（プランターではなく、本物の『土』に触れられる場所があるのは本当に素晴らしい）」

「初めて大根の葉を料理に使用しました。」

自然のリズムに自分を合わせる

「生活には波があるが、植物にはこちらの波は関係なく継続した世話が必須。植物に関わる仕事の方はすごいと思った。」

「I needed to fit into my schedule care for the plants（植物の世話をスケジュールに組み込み、育てたものを食事に取り入れるよう食生活を変える必要がありました）」

「農薬や除草シートなしでうまくいくほど甘くないと痛感。でも環境問題を考え、引き続き努力を重ねていきたい。」

「デジタルデトックスをする時間を取ろうと思いました。」



アジア学院協働プログラム開催

JICUF の助成金により、「アジア学院との協働による、自然と食をテーマにした学びと実践のプログラム」が実施されました。

栃木県にあるアジア学院は、世界中から学生が集い、農業を基盤とした共同生活を通じて農村地域を担うリーダーを育成する学校です。キリスト教によって設立された共通の歴史を持つ ICU とアジア学院は、これまでも継続的に交流を重ねてきました。

2024 年に始まったファームプロジェクトなど、ICU ではキャンパスの豊かな自然を教育に活用しようという機運が高まっています。本プログラムは、アジア学院との連携を通して、学生が自然に触れ、学びを深める機会となることを目指します。

5 日間のスタディキャンプ

本プログラムは、アジア学院での 5 日間のスタディキャンプと、ICU で実施されるワークショップの二部で構成されており、この夏、ICU 生 8 名の参加のもとスタディキャンプが実施されました。

キャンプでは、「つながる、循環する～自然を通じて考えるいのちのこと～」をテーマに、アジア学院について知るさまざまなプログラムが行われました。作業中や共同生活においては、互いにそれぞれの母国が直面している食料安全保障や農村開発などの具体的な課題について話し合いました。この深い交流は、ICU 内では得難いグローバルサウスの現場の視点や、食と平和に対する切実な思いに触れる貴重な機会となり、学生たちの国際性に対する視野を大きく広げる機会となりました。

循環をテーマに回るキャンパスツアー





いのちと平和について考えるワークショップ°

食事や農作業の時間には、学生はアジア学院の学生とコミュニケーションを交わし、互いのバックグラウンドや価値観、文化について語り合いました。

農作業時間「フードライフワーク」



インドカレーワークショップ



ドイツの伝統農法「ヒューゲルカルチャー」からエコシステムを学ぶ



ICUでのワークショップ

スタディキャンプを終えた学生たちは、キャンプでの学びを還元するため、10月25日にICUにてワークショップを企画・実施しました。ワークショップはICUのコミュニティ全体から広く参加者を募り、15名が参加しました。

当日は、一般参加者にむけて、エコシステムを学ぶゲーム形式のレクチャーがなされ、その後は現地にて、アジア学院で実践した「ヒューゲルカルチャー」を実際に製作しました。「ローカルリソース」を活用するというアジア学院の考え方を軸に、枠にはキャンパス内で伐採した竹を用い、内部の資材にはフォレストガーデン周辺で得られた枝や落ち葉、雑草を活用しました。



当日は雨天のためランチは屋内での実施となりましたが、インドアッサム州出身のアジア学院スタッフの出身地の話がなされ、その後は一般学生、プログラム参加学生、アジア学院のスタッフ同士でそれぞれの経験や今後の展望など、さまざまな対話が繰り広げられました。

キャンプ参加後の感想

アジア学院でのキャンプに参加した後の感想をご紹介します。

学問としてではなく

『自分の命の問題』として環境を知る

「自分が食べるものがどうできているか知ること、自分の体が何でできているか知ることだと学びました。環境問題を単なる学問としてではなく、自分の命の問題として捉え直す必要があるのではないか、と考えさせられました。」

人間を中心とした

『循環』の解像度が上がった

「これまで自然中心に考えていた『循環』が、アジア学院では人間の生活を中心に行われていると感じ、新たな視点を得ました。対話を通して、目指したい理想の環境のあり方についての解像度が少し上がった気がします。」



自分自身の『リアル』に出会う旅

スマホから離れ、大地やいのちについて学ぶことで、全部がフェイクに思えていた『生きる』ということに、久しぶりにリアルを感じました。リアルを探すこと、リアルに出会うことが私の生きる意味かもしれないと思えるようになったのは、大きな発見でした。



言語化することで見た、新たな自分

「農業に関することよりも、自分自身のことを深く知ることができた。リフレクションの時間に自分の考えを言語化し、他人からのフィードバックを通して客観的に自分を捉え直すことで、すっきりとした感覚が得られました。」

食べ物の背景を味わい、命の連鎖を実感する

「大きな自然の中の命の連鎖をいただくことで自分が生きられていると実感できました。今まで作業的に感じていた食事、食べ物の背景を考えて味わって食べられるようになった。身体を動かして自然と触れ合う楽しさにも気づけました。」



2025 年度の活動一覧

2025 年度にファームプロジェクト（ICU 三鷹キャンパスの森事務局）が主催・共催したイベントや活動をご紹介します。インターン制度も始まり、イベントなどを通じて学生や同窓生のプロジェクトに対する認知が大きく向上した年となりました。

2025 年度自然関連企画・イベント一覧

開催時期	企画名	対象	人数
4/11	三鷹大沢わさびの試食会	学生・教職員	83
4/15	「ICU 三鷹キャンパスの森」説明会	学生	30
5/27	ファームマネージャーとキャンパスの自然を散策しよう	学生	4
6/17	ICU びわの試食会	学生・教職員	90
春学期	Farm Days	学生・教職員	25
7/1-7/5	ARI×ICU サマーキャンプ@アジア学院	学生	8
10/25	ARI×ICU ワークショップ@ICU（ヒューゲルカルチャー）	学生	15
12/13	「ICU の今を知る～自然編」（同窓会員向けオンラインイベント）	同窓生	80
2025/12	ものづくりラボコラボ企画 ICU で育てたモミの木でクリスマスツリーをつくろう		
2026/1/22	CTL コラボ企画マインドフルネスイベント		
秋学期	Farm Days	学生・教職員	13
冬学期	Farm Days	学生・教職員	24
2025/4-2026/3	ICU アーカイブズにて、ファームプロジェクトに関する展示		

教育・研究利用実績

名称	内容
CHM381 化学特別研究Ⅰ	化学（特に環境化学）に関する専門的な研究(アグロエコロジー、土壌化学など)を実施するうえでの実習フィールドとして農地を利用。履修者数 12 名。
CHM382 化学特別研究Ⅱ	上に同じ。履修者数 32 名。
山口俊也（教養学部 4 年）	農地の一面にて、卒業研究及び、CHM212 分析化学実験において、「コーヒーグラウンズ添加における土壌中の亜硝酸態及び硝酸態の変化」を実験。
小嶋陽太（教養学部 4 年）	研究テーマ「都市・都市近郊における農的な経験と人間と自然とのつながりについて」。調査フィールドとして FARM DAYS を活用。

おわりに

ICU ファームプロジェクトが始動してまもなく2年が経ちます。

かつては手付かずだった場所が、今では学生の手によって耕され、物理的な整備が進むとともに、土に触れ、対話を楽しむ活動の輪も着実に広がってきました。

この歩みは、決して私たちだけの力では成し遂げられなかったものです。

プロジェクトの発展に向けて、多大なるご支援を賜りました JICUF（日本国際基督教大学財団）の皆様、そして温かいご寄付をお寄せくださった支援者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。また、日々フィールドに足を運び、プロジェクト推進に関わってくれた学生、見守り協力してくださった教職員の方々、このプロジェクトに関わる全ての人々に厚く御礼申し上げます。

2026年度から始まる本学の中期計画では、「キャンパスライフの質向上」や「豊かなコミュニティの創出」が重要な柱の一つとして掲げられています。ファームプロジェクトもこのビジョンに歩調を合わせ、さらなる活用と深化のフェーズへと向かいます。

新年度は、より多くの学生や教職員が日常的にこの場所を訪れ、さらには同窓生の皆様もキャンパスに集い、世代を超えて一緒に活動に取り組めるような、ICUらしい多様性と包摂性に富んだコミュニティを目指してまいります。

これからも、私たちの挑戦を見守り、応援していただけますと幸いです。

引き続きご支援とご協力のほど、何卒よろしくお願いいたします。

国際基督教大学環境推進部
ICU 三鷹キャンパスの森事務局

担当：ファームマネージャー 堀内千種

2025 年度 ICU ファームプロジェクトアニュアルレポート
製作：ICU 三鷹キャンパスの森事務局（環境推進部）
2026 年 3 月 10 日

